

エピソード

抱っこで保育者と園庭探索をしていた A 児。いつも遊んでいるままごと遊びの場のそばに来た時、下に降りたいと足を動かはじめました。

保育者の抱っこから降りると、クヌギの雄花が一本入ってる鍋をみつけました。親指と人差し指を出して保育者の顔を見ている姿は、『雄花に触ろうか、どうしようか…』と迷っている様子でした。「何だろうね。触ってみる？」と保育者が声をかけると、雄花を摘まんで見せてくれました。「ふにゃふにゃだね。カサカサ音がするね」と保育者が話しながら落ちているたくさんの雄花を持ち、鍋に入れると、目を大きくして驚き、鍋を覗き込んでいました。…また雄花に触ろうか、どうしようか迷っているようです。雄花を集めている保育者とふと目が合いました。その表情は“触っても大丈夫？”と訊ねているかのようでした。そして、そおと雄花に触り始めた A 児に「いっぱいフワフワしてるね」と言うと、初めは指に絡みついた雄花に口を尖らせていましたが、保育者が遊ぶ姿を見て頬を緩ませて、雄花を自分で鍋から出したり入れたりして、繰り返し遊ぶようになりました。

子どもの育ちや学び

鍋の雄花に興味を持ち、触ることに迷いはあったけれど、安心できる保育者がそばにいたことで、勇気を出して「触ってみよう」と、指先でつまんで、指先を使って遊ぶ経験、五感(触覚)でものに触れ、感じる経験となりなした。次第に「もっと」と手のひらで握ったり、つかんだりして鍋への出し入れを繰り返したことは好奇心を掻き立てることにもつながっていきます。

保育者の思い

保育者は、何だかわからない興味がある物に触れることに不安や抵抗を感じていた A 児が、この日は雄花を見つけて、どのような行動をするのかを、一緒に遊びながら知りたいと思っていました。

すると、A 児は目を大きくしたり、口を尖らせたり、頬を緩ませたりして保育者に思いを伝えようとしていました。保育者は A 児のその反応に、言葉や表情で応え、一緒に楽しむようにしました。安心できる保育者と一緒だからこそ触っていいものか迷っていた雄花に触れて遊ぶということも楽しむことができたように思います。

家庭だったら…

子どもは、指差しや仕草、表情で様々なことを大人に伝えようとしてくれています。是非、膝をかがめて、子どもと同じ目の高さで物事を見て、一緒に感じて、言葉で表現してみてください。一緒に楽しいことを経験することは、子どもにとって自信となり、次へのステップアップにつながります。また、子どもたちは掛けてもらった言葉はしっかりと脳に蓄えています。今、この時期の言葉でのやり取りも大切にしていきたいですね。

